

研究主題『相手の気持ちを考える心の育成』

I はじめに

昨年、いじめの問題が大きく取り上げられるようになった。いじめの問題は、昨今始まった問題ではないが、マスコミ等でも大きく取り上げられ、いじめによる自殺者は後を絶たない。いじめ問題はなかなか難しい問題ではあるが、相手の気持ちを考える児童を育成することが、この問題の解決への糸口になるのではないかと私は考えた。そこで私が思いついたのがドラマ作りの制作であった。私はこの映画の役を通して、児童1人1人が相手のことを考えるチャンスになればと思い、期待を込めて活動を開始した。そして、相手のことが考える児童の育成は、『いじめ防止』へとつながっていくと考えた。

II 映画クラブを結成する

小学校の教育課程の中には、特別活動の時間がある。私の学校ではクラブ活動の時間がそれにあたる。だいたい年間で15時間くらいの活動である。クラブには、球技クラブ、バドミントンクラブ、イラストクラブなど様々な活動があるが、私は、このクラブ活動の中に、映画クラブを結成することになった。クラブ希望調査が始まると、映画クラブが一番人気のクラブになった。テレビで見てるようなドラマが作れる。それだけでも、児童にとっては心の躍る活動であった。

III 映画クラブ活動計画

私は、クラブの活動を3段階で考えた。なれる・体験する・判断するの3つの段階である。

第1段階 (なれる)	・ビデオカメラでの撮影になれる。 ・映画作りの楽しさを体験する。
第2段階 (体験する)	・自分の立場と置き換えさせて児童に考えさせる。 (セリフや役などを児童に考えさせる)
第3段階 (判断する)	・自分ならどうするのかを考える。 ・自分が選んだ行動によって相手は、どう思いどう変わっていくのかをシュミレーションしていく。

まず、最初の第1段階は、撮影になれるということである。先生にただやらされているのではつまらないし、この活動の意味がなくなってしまう。また、大人であってもカメラを回されて撮影されるのは大変恥ずかしいものである。撮影が進むに従って、より深く児童が考えていけるような設定に考えた。

①活動1 シナリオ作り

映画クラブの第1回目の活動は、シナリオ作りである。まず、児童1人1人に真っ白な紙を渡し、『いじめ』というテーマで1人1人が映画のシナリオを作った。シナリオ作りはとても難しかったが、1人1人がそれぞれにいじめについて考えることができた。

②活動2 撮影開始 セリフ作り

2回目の活動から、さっそく撮影に入った。しかし、大胡小学校の映画クラブが、他の映画撮影と違うところは、台本はあるがその中にセリフが入っていないことである。児童は、それぞれに台本を元に、自分ならどんなセリフをいうのかを考える活動を取り入れた。いじめる役の人、いじめる人の気持ちになって、いじめる役のセリフを言う。また、いじめられる人は、いじめをうけて、そのときの気持ちをセリフにしてみる。実際に起こっ

ているいじめではなく、映画の中での話なので、児童は冷静に考えて相手の気持ちやそのときの自分の気持ちと向き合うことができた。

③活動3 反省会

活動後には、反省会を必ず開いて、映画の撮影をしていて感じたこと思ったことなどを児童ともに話し合う時間を設けた。

④活動4 ミニ上映会

ある程度撮影が進むと、ミニ上映会を開いた。途中までの映像ではあるが、またそれを見ることによって児童は映画の撮影に関心を持ち、撮影に意欲をもって取り組むことができた。

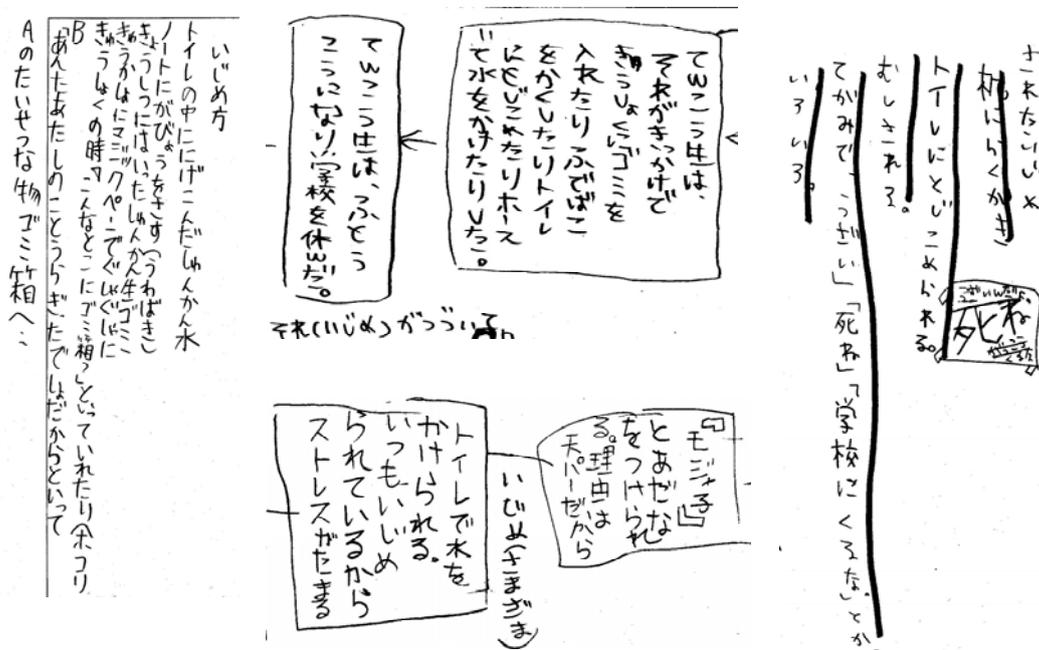
大胡小の映画クラブの活動は、この活動の繰り返しで1年間撮影を続けてきた。そして、本当の友達という1本の映画が完成した。

IV 研究の成果

1、一番はじめのシナリオ作りで

今まで一度もいじめをしたことがない児童にも関わらず、いじめのストーリーを考えられたということは、1人1人の児童の中には種というか、芽というものがあるのだと改めて感じさせられた。中には、かなり内容が過激なものがあった。そして、やはり一番多かったのが『死ね』という言葉であった。

子どもの中から、あまりにも簡単に死ねという言葉が出てくることに大変驚いた。その内容はあまりにも現実的であり、私は大変に驚かされた。



うくらい辛かったと話した。

また、あるリハーサルでは、ある男子のグループが映画のリハーサルなのに自分の悪口をどんどん言われて、それに腹が立ってしまって、演技なのに本当のけんかを始めてしまったという事件もあった。しかし、このことを通し、誰でも悪口を言われることのつらさを体験した。

●それ以外の立場の人たちの気持ちの変化

最初は、見て見ぬふりや、どっちにつこうか迷っていた児童であったが、撮影が進むに従って、普段は仲のいい主人公が、どんどんいじめられていくシーンを見てみて、なんだかとおも切ない気持ちになってきたと言う。ミーティングでは、「先生、僕たちには、どうして反対する勇気がなかったのだろうか」と答えた。

●いじめはみんな楽しくない

それは、第2話までの撮影を終えての児童全員の共通した認識であった。またある児童は、このことを「毎日が曇りで晴れない」とも答えた。いじめは、いじめる人も楽しくない。いじめられる人も楽しくない。また、まわりにいる人も楽しくない。全員がそれを感じてくれたのである。また、撮影を通して、1人1人が体験することができたのであった。

いじめる役・いじめに反対する役・見守る役・こっそり助ける役・見て見ぬふりの役

2、どうしてその役を選びましたか？

いじめる人の気持ちになってみたいと思った。

3、その役をやってみて、どうでしたか？

いじめるのもつらいし、
いじめられてる人の顔をみるのがつらい。

いじめる役・いじめに反対する役・見守る役・こっそり助ける役・見て見ぬふりの役

2、どうしてその役を選びましたか？

その役をえらぶときはあがたけどその中をいざえらびてみる
とすこし怖かったです。

3、その役をやってみて、どうでしたか？

その役をえらびてやるあたりはわかっていられたけど
心の中はすごくいやな感じでした。

いじめる役・いじめに反対する役・見守る役・こっそり助ける役・見て見ぬふりの役

2、どうしてその役を選びましたか？

家族にしてみても苦しいから

3、その役をやってみて、どうでしたか？

やっぱり苦しい。見て見ぬふりも苦しいし、

いじめる役・いじめに反対する役・見守る役・こっそり助ける役・見て見ぬふりの役

2、どうしてその役を選びましたか？

もし本当のいじめがあるとしても私は、いじめに、ほん
たいはできないけど、だからこっそり助けてい
と思うので、この役をえらびました。

3、その役をやってみて、どうでしたか？

これが本当だったら本当にこっそり助けて、
できるか、本当にこの役が出来るか、は
でした。

いじめる役・いじめに反対する役・見守る役・こっそり助ける役・見て見ぬふりの役 1. 演じた役【自分が選んだ役に○をつけましょう】

2. どうしてその役を選びましたか？

いじめを反対する方を選びました。
もしもいじめる方になってしまえば後悔するから。

いじめる役・いじめに反対する役・見守る役・こっそり助ける役・見て見ぬふりの役

2. どうしてその役を選びましたか？

いじめを反対する方を選びました。
もしもいじめる方になってしまえば後悔するから。

3. その役をやってみて、どうでしたか？

いじめる役・いじめに反対する方・こっそり助ける役

3. その役をやってみて、どうでしたか？

つらかったです。

クラブ最後の日、クラブ員全員で完成上映会を開いた。改めて出来上がった自分たちで作った映画を見てみると、感激し涙を流す児童もいた。映画作りをして、一番感動するのは、自分たちで作った映画を自分たちで見るというときではないかと思う。自分たちで苦労した分感動もより大きいのではないだろうか。最初は、いきなり先生に「いじめ」の映画を作ると言われて始めた活動であったが、撮影が進むにつれて児童はいろいろな点に気づき多くの変化を遂げたのであった。上映会の後、児童は、それぞれに1年間のクラブを振り返っての作文を書いた。本当に、どの作文からも大きな児童の心の変化が読めた。映画を作る過程に於いて児童は多くのことを学ぶことができた。クラブを始める前の私の指導は、ただ、いじめについて考えなさいと言うだけで、児童はあまり考えなかったし取り組みも積極的ではなかった。しかし、映画クラブを設立し、「映画の撮影」という活動の中で、児童は、楽しみながらよりそれぞれの立場について自然と考えることができた。また、役を演じることによって役の人の気持ちがわかるロールプレイングによる効果は大きいようだ。次に、児童の作文によって見られた変化の例をいくつか見てみたいと思う。

僕は、映画クラブの第3話まで撮り終えて2つの大切なことを知りました。その中の1つは、友達をかばう勇気です。ぼくは、勇気が全然なくすごく恐がりです。いじめがおきても見て見ぬふりをしかできなくてすごく悔しくなります。2つ目はいじめを絶対にしないことです。最近いじめ問題がすごく多いし、いじめをしたりされたりして、自殺することがあります。この映画は、自殺する一歩手前まで演じてみんなすごいと思いました。たとえば、演技でも自分はすごく複雑な気持ちで演じていました。だからいじめは絶対にいけないと思います。(A君)

映画クラブでのビデオ制作で僕が思ったことは、いじめをするとされた人がとても傷つくということを改めて実感しました。だからぼくは、相手の気持ちになって言葉を使いたいと思います。気軽に『死ね』と使って本当に死んでしまったら一生心に残ってしまうので、『死ね』という言葉は絶対には使わないようにしたいです。いじめられている人を見たら、いじめてる人に注意ができる人間になりたいです。もし、僕がいじめられても死ぬと考えるでないでいじめにたえられるような強い心を持ちたいです。もし、このビデオが全国の小学生が見てくれたら、いじめで苦しんでいる人が1人でも多く救えたらいいと思います。

した。(B君)

私は最初映画クラブで映画を撮るから楽しそうだなあと軽い気持ちで入りました。でも、撮影していくうちにいじめのことを知っていき、いじめっていけないことなんだなあとわかりました。そして、友達の大切さもわかりました。私はいじめ役をしました。なぜかというといじめる人の気持ちが知りたかったからです。私は、いじめる人の役をやっといじめる人もつらいことを知りました。私は、映画クラブに入っているいろいろなことを知りました。だから映画クラブに入ってよかったと思います。(Cさん)

私は、映画クラブができたと聞いて好奇心から入りました。一番はじめの台本が配られたときは、うまくできるかなと色々思いながらしました。初めは緊張してセリフで精一杯だったけど、だんだんやっていくうちに物語の意味を考えられるようになりました。今回作った映画は、いじめをテーマにした映画でした。いじめなんか関係ないと思っていたけれど、いじめは身近にあるんだとかいじめは絶対にいけないと思えるようになりました。1年間映画を作って出来上がった作品を見たときはすごく達成感がありました。映画クラブに入って本当によかったと思いました。(Dさん)

私は映画の撮影をして「いじめ」について深く考えるようになりました。いじめる人、いじめられる人。両方の気持ちがわかるようになりました。私自身いじめる人として演じました。そのとき最初に思ったことはいじめられるなつきちゃんの表情でした。たとえ演技だとしても本当に悪口などいわれているような感じでかわいそうだなあと思いました。本当にこんないじめがそばであったら、どうなっちゃうんだろうと思いました。いじめられる子が自殺したくなるようなまで追いつめたいじめは、なんなんだろうと思いました。いまだにおさまっていないいじめをこの映画をみて考え直してほしいと思いました。(Eさん)

私は、この1年間でさまざまなことを映画クラブで学びました。いじめに対する言葉の暴力、自殺などでいろいろなことがわかりました。言葉の暴力では、死ねなどという言葉を使っていじめをしたり、軽々と人に言ったりとふだんでやっていることのように演技したりしていわれる人の気持ちにもなれました。今回の映画のように、いじている人、されている人、自殺を考えている人はなんでこんなことを考えているのかと考えてみれば、自殺をしなくてすむのかもしれない。この1年間の映画クラブではいじめに対する映画を作りました。中学校に行ってもこの映画を作ったことを忘れないようにしたいと思います。(Fさん)

V おわりに

手探りで始めた活動であったが、大きな成果を得ることができた。第3話では、いじめていた役の人が自殺をしていなくなったという設定から撮影を始めた。そのとき、児童全員で第2話の時に、どうして助ける役を選ぶ人が少なかったのかを話し合った。すると、全員でわかったことは、勇気がなかったと言うことであった。もし、いじめた人がいなくなったとき、その時後悔しても遅い。なんであるとき助けてあげられなかったのだろうと考える児童が多くいた。また、いじめる役をやった人も、そんな自殺するなんておもわなかったと気づく児童が多くいた。そして、その中から、どうしたら勇気を出せるかを児童全員で話し合った。この活動を通し、児童は多くのことに気づいた。今回映画クラブでは、『いじめ』の問題に取り組み、児童がそれぞれの立場で役を演じ、その人の気持ちに近づ

けたことは大きな収穫だったのではないかと考えられる。

映画作りを通して、児童1人1人が役を通し成長した点は、

①小さな勇気を持てるようになった。

いじめを許さない勇気、いじめをしない勇気、いじめを助ける勇気を1人1人が持てるようになった。最初はいじめを助ける役がいなかった児童が自ら演技を通して、その役がいなかったことを後悔し生徒自ら勇気を持てるようになった。それを映画だけではなくクラスや、普段の生活にもいかすことができ、いじめのない学級作りができるようになった。

②学級全体で、ことばに対する意識が改善した。

③相手の気持ちを考えることができるようになり、励ましの言葉が増えた。

相手の立場や気持ちが考えることができるようになり、いろいろな場面で相手のことを考えることができ、『がんばれ』などの励ましの言葉が多く飛び交うようになった。

④すなおに『ごめんなさい』が言える子が増えた。

物語の中で、児童は最後の結末に『ごめんなさい』を選んだ。なかなか言いにくいことではあるが、悪いことをしたらきちんとあやまることが大切であると児童が感じたようで、クラスでは、きちんとあやまれる児童が増えた。

⑤『本当の友達』という映画作りを通して、本当の友達をクラスで見つけられた。

本当の友達という映画の制作を通して、児童は友達の大切さ気付き、クラスはとても明るい雰囲気につつまれ、友達と仲良くそして、みんな全員が明るく楽しく暮らすことができるようになった。

⑥いじめと自殺の関係にふれ、命の大切さを伝えることができた。

1人1人が自殺と言うことを考えることができた。たった1つしかない命の大切さと、自分でも、そして、他人にも決して奪ってはいけない命について考えることができた。

などの点が大きな成長した点として上げられる。まだまだ、児童が成長したと感じられる点はたくさんあるが、映画の制作を通して、それぞれが役を通し相手の立場に立って考える活動は、『いじめ問題』の解決だけでなく、児童の心の成長とそして、相手のことを思いやり、よりより関係を築いていこうとする児童の育成に大きく役に立ったと確信した。

この映画クラブの活動が多くのマスコミに取り上げられ、全国各地からたくさんのありがたい励ましの言葉や、質問のお手紙が届くようになった。また、映画クラブが制作したDVDは無料で希望する全国各地の学校や家庭に配布されるようになった。財団法人権教育啓発推進センターの協力で500枚コピーされ、児童が作ったいじめの映画は全国各地へ配布されている。現在いじめの問題は、とっても複雑で難しい問題であるが、いじめる側も、いじめられる側も、中立の立場の人も、全員が小さな勇気をもって立ち上がってほしいと思う。